
うりと夏休み～うり～

ぬこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うりと夏休み〜うり〜

【Nコード】

N2297B

【作者名】

ぬこ

【あらすじ】

うりと夏休み、区切りです。あのとき何をみて、何を考えていたのか。そして、うりが瑠璃であったころの過去のオハナシです。

「ホラ、とつととでていきな！」

「う・・・」

「もう、ココにいたってアンタに食わす飯はないんだよ！」

「あう・・・。」

「村へ帰るなり野垂れ死ぬなり好きにしな！」

「けほっ・・・。」

「おおいやだ、二度と帰ってくるんじゃないよ！」

けほっ。

乾いた咳が、一つ。

冷たい空気が、ひんやりと乾いていて。

冷え切った全身が干からびていくようで、ぎゅっと自分の両肩を抱く。

町に、連れてこられたあの日も、寒かった。

同じくらいの年の子と、手をつないで、「コワイ」に襲われない様に、体をちぢこませて。

町を連れられて歩きながら、一人、一人と吸い込まれていく大き

な家を見ていたのは、どれくらい前だったか。

冷たい眼差しを向けられて、

「入んな。」

と、腕を引っ張られ、じろじろと見定められて、それからどの位あの家に住ったのか。

土間に、破れたゴザを一枚。

そこが、幼女の寢床であり、食事場所であり、部屋であり。

辛うじて湯気が立つ、固形物が混じったといった程の粥を日に二、三度。

朝は日の出前から、夜は主が寝静まるまで。

床を磨き、店先を掃き、洗物をし。

冷たい水に小さな指先を裂かれ、破れ衣に足をしもやけにして。

どれ程の間、すごしてきたのだろうか。

ある日、幼女の生まれ育った村に病が訪れた。

先ず、咳から始まり、高熱が出る。

長い者でも半年かそこら。短いものでは、半月。患った後、村の外れに土饅頭が増えた。

じわじわと流行りはじめた病は、村中に広がり。

働き主が病となれば、収入も減る。

貧しい村に、医者と呼ぶ金などあるはずもなく、食料もなく。

病に襲われる前にと、口減らしにと、それぞれの思いを込められて、町へと売られていく、年端も行かない子供。

村に比べれば、裕福といえる町。

人の出入りも多く、それなりに賑やかな表舞台。

賑やかで、華やかであっても、病は公平に襲い掛かる。

咳をするものを見れば、病と恐れ。

病を恐れて出歩く人も、減り。

そうなれば、店の売り上げも減る。

収入が少なくなつては、余分な人間を置いておく余裕もなく。

只でさえ、辛うじて固形物が入っていた程度の粥は、日に一度になり、湯になり。

真冬に、湯を沸かす手間と費用を惜しまれて、水になり。

家人に病が現れれば、残された者は避難し、家人以外の人間が、世話にあたる。

例えば、小遣い錢程度で買った小間使いの娘。

一月も働かせれば、十分に元は取れるのであるから、万が一、病が移っても、捨てればよい。

変わりは、幾らでも手に入る。

「ふうう……。」

冷えた指先に、息を吹きかける。

「けほっ！」

吸い込んだ空気が、乾いた喉を刺激する。
少しの間、肩を震わせて咳込む。

じわっと滲んだ涙を、指で拭い、唇に。

温かくて、しょっぱい涙は、乾いた唇に吸い込まれ。
その、乾いた喉までは届かない。

「とー……。ちやあ……。」

薄暗い、森の中。

此処を通って街に連れられていったのは、いつかの昔。
何度も夢に見た、帰り道。

「かーちやあ……。」

あの時手をつないでいた、あの子は。
すすり泣いていた、小さな男の子は。

足を引きずりながら歩いていた、あの女の子は。

誰も、いない。

持ち物も無く、寒さから身を守る衣服も、いつかの破れ衣。

何度も願い、焦がれた、村への帰り道。

いつか、きっと、共にここを歩いてきた皆と共に帰れるのだと信じて、それを希望に過ごしてきたこれまでの日々。

おかえり、と。

そういつて抱きしめてくれるあの手は、この道の先。

皆で、手を繋いで帰れるはずだった道。

今は、誰も、居ない。

「・・・つく。」

こみ上げてくる「サミシイ」に、襲われそうになる。

ぐっと自分の肩を抱いて、はるか彼方、上空の星を見上げる。

立ち止まり、見上げた空には、丸い月。

凜とした静けさが、冷えた体を包む。

まるで、冷たい空気が、霧のように。

冷たい霧が、水のように。

冷たい中を突き進んで、歩いた後にはほんの少しでもぬくもりが残るのだろうか。

振り返る後には、闇。

伸ばした指先に触れる空気は冷たく。
再び、幼女は前を向いて、歩き出す。

キュルル・・・

小さな音に、目を覚ます。

「・・・へったあ・・・。」

腹をさすり、ぽつり、と呟く。

歩き疲れ、枯葉の積もった木の下に座り込んだまま眠りに落ちたのか。

破れた衣の下、むき出しの腕が血の気を失って、ひんやりと冷

たい。

顔の表面も、足も。

まるで、血が通っていないかのように、青白く、冷たい。

ただ、ぐらぐらと回る視界と、絶え間ない渴きがまだ生きている、ということを実感させる。

せめて、夏であったのなら、夜露で少しは渴きを癒せるのに。

雨も降らず、乾いた真冬の森の中。

霜柱でも立てば、ひりつく渴きを癒せるのに。

体を起こし、落ち葉を掻き分けてみるが、何も無い。

カサカサ、と冷たく、ささくれ立った手に木の枝が容赦なく刺さる。

土を掘って見ると、そこには僅かに朽ちて、柔らかくなった木の葉。

指先で揉んで見ると、しっとり柔らかい。

キュルルルル・・・

鼻先に近づけて、臭いを嗅ぐ。

土のにおいに混じって、湿った、森の中で嗅ぐにおい。

ほんの少しでも、渴きが癒せれば、空腹をごまかす事が出来れば。

じっとそれを見つめて、おそるおそる、そっと口の中へ。

一噛み、二噛み。

急激に胃の方からこみ上げるものを感じて、激しくえづいて。

「・・・っえっ・・・っかつ！」

口の中のものを吐き出す。

唾液と、黄色い胃液に混じった、僅かに噛み砕いた土と、朽ち葉。

口の中いっぱいに苦い味。

微かに滲んだ涙を震える指先で拭い、舌先に。

急激にこみ上げた吐き気のせいなのか、引きつるように腹が痛む。

乾いた喉を潤す程の涙は滲まず、僅かに目を潤わせ、舌先に微かな塩味と、温かさ。

再び、少女は歩き出す。

「！」

ひび割れた足は、血の気も無く。
乾いた指先の感覚はとうに無い。

何度も躓き、滲んだ血を舐め、乾いた唇の剥けた皮を飲み込んで。

長い、長い森を抜けて。

見えた先にあるのは、懐かしい、村。

幾度夢に見たであろうか。

あの、寒い日に。

泣きながら首に名前札を下げてくれた母親の顔を。

病に伏して、薄い布をかけて、枯れ木のように痩せ細った母に支えられ、何度も頬を撫でて泣いていた父の顔を。

あの、暖かった手の平を。

涙も、枯れ果てたかに思われた、少女の目から、一滴。

ひりひり、とカラカラに乾いた頬に涙が伝い、ボロボロの衣服に落ちる。

「・・・とー・・・ちゃああ、かあ・・・ちゃああ！」

掠れた声で、叫ぶ。

力なく痩せ細り、立っている事すら不思議な、幼女の体から発せられる言葉。

恋しくて、恋しくて。

叫んだ声は、か細く、小さいそれであったとしても。

「と・・・ちゃああ！か・・・ちゃあつ！」

けほつ、とむせながらも、ひたすらに、走る。

荒れ果てた、畑。

音の無い、村。

まっすぐに、ただまっすぐに、家を目指して。

煙の一筋も、ない。

誰一人として、外を歩くものも無く。

乾いた空気に混じって、僅かに風に吹かれて土埃が舞う。

バタツ。

足がもつれて、幼女が転倒する。

ガサガサに乾いた手のひらに、擦り傷。
そして、血が滲む。

あと、少し。

あと少し。

もうすぐ、あえる。

感覚の無い腕に、力を込める。

そして、右足に。

次に、左足に。

顔は、まっすぐ前にむけたまま。

もうすぐ、もうすぐだ。

あとちょっと、頑張れば。

父が。

母が。

また、あの手のひらが。

カタッ。

乾いた音を立てて、既に開いている家の戸に、手を掛ける。

人、一人いない、懐かしい村。

小さな、小さな、ボロボロの家。

それでも、あたたかで、懐かしい、その家。

「とー・・・・・・・・」

けほつとむせながら、呼ぶ、父は。

母は。

「・・・・・・・・」

呆然と、立ち尽くす、幼女。

ぱく、ぱく、と、口が言葉を捜して。

戸に掛けていた小さな手が、だらんと落ちて。

一步、二歩。

ガランとした、家の中。

三歩。

微かに臭うのは。

懐かしい、あの、夢に見た臭いではなく。

四歩。

シン、と冷え切った家の中に、幼女が見たものは。

五歩。

土間の端。

ボロボロの布と、枯れ草に重なるように。

とん、と膝をつく。

その指先に触れたのは。

白い、白い、細い、骨。

しゃがみこんだ小さな少女の周りに、優しい音は無く。
吹き込む隙間風のヒュウウ、という音が、只、響く。

「とー・・・ちゃ・・・かー・・・ちゃ・・・？」

恐る恐る、その、骨に手を伸ばす。

見覚えのある、汚れた着物。

遠い昔の、夢の記憶にある、抱いてくれた時にみた、着物。

触れた骨は小さくて。

ボロボロの着物に温もりは無く。

崩れ落ちるようにしゃがみこんだその体を撫でてくれる人も、いない。

ヒュウウウウウ、と吹き込んだ風が、体に刺さるように冷たくて。

「・・・とっ・・・ちゃあああ！・・・！ かちやあああああああ
あ！・・・！！！！！！」

泣き叫ぶ声は。

その、小さな体が、搾り出す、咳き込みながらの叫び声は。

「とちや・・・っ・・・けほっ・・・げほげほっ・・・つく・・・
・！ かちやあああ・・・！！！！」

誰にも、届かない。

「うあああっ！ とちやあああああっ・・・くっ・・・！！！！ かち
やあああああ・・・げほっ・・・ごほっ！！！！」

無人の村の、誰一人にも。

「とおちゃあああああ！！！かあちゃあああああ！！！！！」

幾度、夢をみただろうか。

目覚めれば、ひんやりと、心地よいところにいて。

ある時は、同じ年頃の少年や少女と、川に。

また、ある時は、山へ。

幾度、夢に落ちたのだろう。

目覚めるたび、少年も少女も変わる。

服装も、村も。

あるとき、目覚めた自分を不思議そうに眺めていた少女は。
木の実をわけてくれた少年は。

優しく、頬を撫でてくれたあの記憶は。

泣きながら、首に名前札を掛けてくれたあの記憶は。

眠りに落ちて、全てを忘れて。

夢から覚めて、混ざっていく記憶は。

いつか、帰りを迎えてくれる場所が、あることを信じて。
次に見る夢も、夢から覚めても、幸せであるように。

——ぱちっ。

「・・・!？」

開いた目に映るのは、男の顔。

「ええええええええっ!？」

次に、聞こえたのは、驚愕の声。
たっぷりと深呼吸するほどの、間が開いて。

「うわあああああああああああ!!!!!!!
ハアハア、びっくりした・・・」

ひとしきり、驚いたあと、じっと顔を覗き込む、男。

「目開いてるとほんと、本物みてーだな・・・」

顔にかかった髪の毛を、どけてくれる。
そして、頬を撫でられて。

「つて、ひいひいひいひい！！！！！！！！！！」

抱き起こされた、体。

その男ごと、床に倒れこんで。

「な、なんなんだよー・・・ジイちゃん、頼むよー・・・。」

すうううっと、ここは、夢じゃない、と幼女に意識が戻ってくる。
前に目覚めたのは、いつだったか。

そのとき、一緒に遊んだのは、少年と、少女。

名を、なんといったか。

「ケンタあ！ずるい！」

「なーにがずるいもんかあ、・・・あ！コウモリだ！」

「うそだあ！」

「うそなもんあるけ！みてみ、ほら！」

見上げた頭上には、小さな影。

翼を広げて、森へと飛んで行くのが見える。

ジリジリと、暑い夏。

夕焼け色に染まった空。

吹いてくる風が肌に心地よくて、懐かしくて。

「したっけ、ケンタあ、瑠璃様、又明日ねえ？」
「おー、又明日なあ！」

そう、アカネと、ケンタ。
手を振って、又明日、と。
握り飯を持って、川で水遊びをして。

どこまでも赤い、夕焼けの道を三人で手を繋いで帰った。
山道を歩いて、アカネの家へ。
田んぼのそばを通って、ケンタの家へ。

そして、また眠りについて。

「よし、警察いこう。」

ひんやりと涼しい土蔵の中、じっと向き合って。
きゅっと、幼女の腕に手を掛けて、その感触に不思議そうに首を
かしげた後、額に手を添える。

「えー・・・っと。」

目の前の、驚いた顔。
言葉を捜すように、一呼吸、二呼吸と目が空をさまよって、息を
吐くと。

「すいません、いっこ聞いていいでしょうか。」
「あいつ。」

あー・・・と、言いかけて、一人頷いて、先を続ける、男。

「アナタ、何者なんでしょうか？」

何か考えているような、途方にくれたような顔をして。
それでも、ぽんぽん、と頭を撫でてくれる、男の手。

てをつないで、どこいくの？

そと、くらののに、どうしてあかるいの？

そらには、せんがはってあって、あちこち、ひかって。

「俺の頭がおかしいのか？」

それでも、じーっと、みつめてくれて。

ぽんぽんってあたま、してくれて、てをつないでくれた。

いっしょに、ねたの。

あったかかったの。

目覚めるたび、違う世界。

全てが新しく、初めてに思えて。

星の明かりの他に、月明かりの他に、夜道を照らす光。

触れてみると硬くて、ひんやりとした壁。

あの日、走った森は、道は、今はどこに？
帰リたかったのは、願ったのは、どこに？

一人、寒くて、暗くて、心細くて。

それでも走ったのは、どこに行きたかったのか。
何を目指して、走っていたのか。

思い出せない。

思い出せない。

でも、つないだ手が、あたたかくて。

「うり、俺の家族。つまり、これからずっと一緒ってことで。」

背負ってくれた、彼の口から出た言葉。

かぞく？

ずっと、いっしょ？

「しっかりとつかまってるよー？」

ぐいっと持ち上げられて、でこぼこな田舎道を走り出した彼の腕が、温かい。

考えるよりも嬉しい事がたくさん舞い降りて来て、目覚めるのが

幸せで。

眠りについても、そこは、冷たい森の中じゃない。
目が覚めても、一人じゃない。

もしかしたら、幸せな夢を見ているのかもしれないと、明け方早く目を覚まして、

「うあーやーと？」

「あー、あとちよつと・・・。」

「うー・・・きあああああ！」

彼の上に飛び乗ると、頭を撫でてくれる、手。

隣に居る、夢じゃない。

おいしいもの、たくさん。

いっしょに、おふろ。

いろんなところ、てをつないで。

「ぱんつ」をくれて、「ぷりん」をくれて。

「いーち、にーい、はーん、ちーい、ごっ。」ってして。

あたま、なでてくれた。

ぎゅって、だっこしてくれた。

いっしょに、いてくれた。

いつてくれた。

「かぞく」で、「ずっといっしょ」って。

「・・・俺の両親が残してくれた財産、ですよね。」

「アンタをここまで育ててやって、それで何が不服なわけ？」

「俺が純粹に金額として受け取れる分って、今現在で幾ら位あるんですか。」

「・・・だから、何回もいってるでしょ。」

「どういふことっすか。」

繋いだ手が、小刻みに震えているのを感じる。

外はじりじりと暑いのに、ほんの少し指先が冷たい。

見上げた彼は、言葉の合間、ずっと唇を噛んで。

ずっと、いっしょ。

「かぞく」って。

ずっと、いっしょ。

あやと。

あやと？

「あやと、いたい？」

「いや、久々にすげえ緊張したりで、だな。うまいメシ食ったらすぐ良くなるから、心配すんな？」

「ともろーし？」

「お、いいなー、ほんとう良かったもんなー？」

「あいっ！」

これがあれば、きっと、げんきになる。

また、いっしょにあそんでくれる。

ふと記憶が交差する。

いつか、畑で。

あれは、夢？

裸足で砂埃をあげて走ったあの道。

最近寒くなったからと、干草を集めたあの記憶。

草を編んで、袋を作って。

干草を詰めながら、そうっともぐりこんだあのときに嗅いだあの臭いは。

そのあと、何があった？

ゴホゴホと咳き込んでいたあの肩をさすって、水を汲んで。

それから、どうなった？

走った。

そう、走った。

また水を汲んであげたくて、咳き込む肩をさすってあげたくて、しわしわの冷たい手をさすってあげたくて、暖めてあげたくて。

だから、走った。

どこを走った？

なにを見た？

なにがあった？

痛いの、苦しいの、なおしてあげることが、できた？

「・・・ほんと、・・・うりのおかげで元気になったから。どこも、いたく、ないよ。」

ぎゅうっと抱きしめて、じっと目を見て。
服の裾で、鼻をつまんでくれた。

月の光が明るくて、彼が不意に、涙を零して。

「うり、ほんと、ありがとな。ほんと、うりにあえて、良かった。」

そういつて、もう一度ぎゅうつと抱きしめてくれた。
嬉しくて、くすぐったくて。

夕方の、夏のおいが立ち込める畑で、二人で手を繋いで、家に向かつて走った。

一緒に、晩御飯にしようって言うてくれた。

おうち。

ずっと、いっしょ。

あやと、いっしょ。

そう、ずっと一緒。

走って、走って。

彼に届けたとうもろこし。

彼は目覚めて、元気になって。

げんき、なった？

なおしてあげるの、できた？

・・・まにあった？

「あじやとつ、もう、いたい、ない？」

「・・・ほんと、・・・うりのおかげで元気になったから。どこも、いたく、ないよ。」

ぎゅっと抱きしめて。

「・・・うり、ありがとな。」

間に合った。

助ける事が、出来た。

ちゃんと、届けてあげる事が出来た。

あの日、戸をあけて見た光景が、少しずつ温かくなる。
気のせいかもしれないけど、夢かもしれないけど。

それでも、気持ちちは、きつと。

「あ、バアちゃん！」

「おやあ、三宅さんとこのニイチちゃん、今日も暑いねえ？」

「こんにちわー、買い物ですか？」

「そうよお、バアちゃん甘いもの好きだから、砂糖買いに来たん
だわあ。」

キコキコ、と音がする、不思議な乗り物。

「自転車」と隼人が言った、それに乗っているのは。

きつと、初めて逢うはずなのに。

なんだか、じわつと温かくて、ほんの少し、寂しくて。

それでも、嬉しくて。

キーンと頭が痛くなって、甘くて、おいしいものを食べた。

小さな「ジョウロ」で水を撒いた。

おにぎり、食べて、オニヤンマを見て、口の中に何かが飛んでき
て。

「バアちゃん」が、おいしいものを一杯くれて。

眠りに落ちて、それでも撫でてくれる暖かな手を感じて、幸せだ
ったこと。

——ホラ、もうすぐつくんだからちゃんとして！
・・・。

ゲームばかりしてないで、外の景色でもみたらどう？
うるさいなー、いいところなんだから静かにしてよ。
せっかくの旅行なのに、ゲームばかりして！——

微かに聞こえてくる、声。

じっとしているのに、田んぼも、川も、手をのばしても届かない後ろに過ぎて行く。

手を伸ばして。

——手を、伸ばして。

いつかどこかで。

いつか、どこかで。

手を伸ばして、届かなくて。

届いた先には。

届いた先には・・・？

振り返る先には、冷たい空気。

一歩、一歩近づいて、伸ばした手の先には、

折り重なるように、
ボロボロの。

ボロボロの。

とーちやあ、かーちやああああ？

るり、かえってきた。

むら、かえってきた。

とーちや、かーちや。

おうち、かえりたい。

おうち、かえりたい。

おうち、かえりたい。

「うり、大丈夫か？うり！」

——イタいやツがいるよー、ホラ。

ナニ言ってんの、アレ。

うりがなんとかって、ナニ？

電波きちゃってるんじゃないのー？

それウケるんだけどー。

「うり、・・・うりっ！！！！！！」

とーちや、かあちや？

るり、かえって、きたよ。

おうち、きた。

とーちや。

かーちや。

・・・どこ？

とーちや。かーちや。

「なあ、早く、帰って来いよ。俺、待ってるからさ。」

あったかい、手のひら。

ぽとっ、と温かい、何かが、頬に落ちる。

つうつと頬を伝って、滑り落ちて、やがてひんやりと冷たくなつて。

どこ？

まっくあ。

かえってこい？

まってう・・・？

とーちゃ・・・かーちゃ？

うー。

「ちゃんと、おかえりって言ってやるから。」

おかえりっていつてくれる？

るり、かえってきて、いい？

るりの、おうちここ？

あの森を抜け、冷たい道を走ったら。

あの戸をあけたらそこには願ひ続けたあの家が。
信じて疑わなかった、未来が。

たあいまって、おうち？

あやと・・・？

あやとっ！！！！！

「おかえり。」

「たあまっ！」

あの日、迎えてくれた、あの記憶。

太陽がじりじりと照りつけて、水を零すと、地面がきゅるきゅる、
と音を立てていた、あの記憶。

ぎゅっと、抱きしめて、名前を呼んで、おかえりと。
頬に落ちた、温かい感触と。

あの日の、麦藁帽子と、セミの声は、今でも目をつぶるたびに、
瞼の裏に、鮮やかに。

確かに、「おかえり」と。

「うーりー、ほら、口開いてると湯がはいるぞっ！」
「う？」

ざばーっ。

「あー♪」
「お、気持ちいいか？」

全身に、温かい湯。

「うり嬢、頬に泡が。」
「いやとっ♪」

頬を拭ってくれる手は、温かく。

「寒いと思ったら、ほら、外みてみっ！」
「お。雪である。」
「うき？」

月明かり越しに、白い光が転々と空から降ってくる。
窓から手をのぼしてみると、その手に触れるのは、ひんやりとした感触。

「明日、雪積もるといいなー、そしたら、カマクラ作ろうぜっ！」
「うむ。中で一杯やろう。」

そう言って、すぐ隣で手の平に雪を受ける、男。

「隼人。」

名を呼ばれ、振り返る。
つられて、その声の主を見る。

「土鍋は、あっただろうか。明日は間違いなく積もるようだ。クリスマスにカマクラとは、風流な祝日になるな。」

「嬉しいなー、土鍋はあるから、うまいもん買いに行こうぜっ！
・・って、雲野、肩に泡がついてるぞ。」

もう一人、雲野と呼ばれた男がにと笑って、肩の泡を洗い流す。

「うり嬢、今夜は枕元に靴下を置いておくのを忘れぬように。」
「う？」

「ほら、昼間バアちゃんとミヨコさんがくれただろ？」

昼間、二人がくれた、大きな入れ物。

赤くて、硬くて、足を入れるカタチをしていて。
その中には、たくさんの美味しい物が入っていて。

「おおおお！」

クリスマスブーツ、という、それを、二つ。
お菓子を取り出して、足を入れて、歩いて。

晩飯のあとで、隼人と雲野がくれたのは、小さな柔らかい、靴下。

赤くて、ふわふわしていて、温かくて。

「今夜、寝る前には枕元にあれおいておくんだぞ？」

「う？」

「そうすると、明日の朝目が覚めたら、良い事があるのだ。」

「くつつた、おいたあ、いいこと？」

「うむ。」

「あいっ！」

にゃーん。

「お、えこ、おかえりっ！」

「では、そろそろ出ようか。」

にゃーん。

「んじゃ、いーち、にーい、さーん！」

「ひー、ごっ、おーく！」

「七、八、九。」

「にゃーん。」

「っかー！、夏の風呂もたまらねえけど、こう、寒い日に風呂つかって、じわーっとくるのもたまらねえよなっ？」

「うむ。体の芯から温まり、外気との気温差がまた心地よい。」

「あー♪」

風邪を引かないように、と念入りに頭と体を拭いてもらい。いつもの廊下を渡って、居間へと戻る。

澄んだ冬の空気の中で空を見上げれば、一面の星がチカチカと瞬いている。

「ほら、うり、腹でてるぞっ？」

「ふむ。近いうちにうり嬢にハラマキを進呈しよう。」

「はあまち？」

「はらまきっ……って、雲野、編むのか？」

「やってみよう。出来ないことはないと思われる。」

「マジかっ!？」

「うむ。可愛い、猫の飾りが売っているのを先日のおスーパーで見かけた。あれを貼り付けて、一つ作ってみようではないか。」

そういうと、すっと抱き上げて、肩上に担ぎ上げる、雲野。

「きゃあああああああ♪」

目線が高くなり、開ける視界が新鮮で、懐かしくて。

手を伸ばし、ぺたぺた、と彼の坊主頭を撫でる。

その横には、隼人が笑いながらぼんぼん、と背中を優しく叩いてくれる。

襖を開けて、居間に入り、掘りごたつにあたり。
隼人の膝に乗って、分厚い布団を被り、彼が入れてくれたリンゴ
ジュースに口をつける。

「雪、うれしいなー。」

「うむ。都内ではそう積もるといふ事はないのでな。我は一度、
カマクラを作ってみたかったのだ。」

「あ、俺も！滅多につくれるもんじゃねえよなっ？」

「明日の夜は、カマクラの中で聖夜を祝おうではないか。」

「うんうん、うり、明日はパーティーするぞっ！」

「かぼちゃっ!？」

以前、「ぽーてい」と。お祝いと。

一面に並べられた、おいしいもの。

火を吹き消して、食べた、甘いもの。

「かぼちゃ、すきだなー、よし、かぼちゃも買おうな？」

「おおおおお！」

「ぷりんもかうぞー！」

「きゃあああああ！」

袈裟懸けの男が、ふと黙り込んで。

人差し指を立てると、片目を開けて言う。

「・・・かぼちゃプリン、というのはどうだ？」

「!!!!!!」

「それ、いい!!!!!!」

しんしん、と雪が降る。

静かな夜に、三人で布団に入り、枕元には、小さな猫。

隼人が読んでくれるお話は、マサカリを担いだ少年が、熊と相撲をして。

忘れないように、靴下を置いた枕元。

ゴロゴロ、と心地よい、猫が鳴らす喉の音。

雲野が掛けなおしてくれる布団からは、日向のにおいがして、穏やかで。

思わず、うつらうつらと、瞼が重くなり、暖かな夢に誘われる。

「うり、寝たか？」

「寝たようだ。では。」

がさごそ、とそうっと体を起こしてうりの枕元を探る、二人。
チリン。

「む、・・・大丈夫だな？」

「うん、寝てる。」

カサコソ。

「あれ。」

「む。」

その枕元に、靴下は無い。

「忘れたのか？」

「いや、そんなはずは・・・む、隼人。」

手探りで見つけたその場所は、隼人と雲野の枕元。

そして、えこの側に、不器用に揃えたクリスマスブーツ。

「・・・いいことあるから、って、うりっ。」

「・・・思いがけず、プレゼントをもらったな。」

そういつて、二人で暗がり、月明かりの元笑いあうと。

「では、こうしよう。」

「だなっ。」

えこの側のクリスマスブーツに、赤い小さな鈴のついた首輪を。

そして、もう一つのクリスマスブーツをうりの側において、そつと包みを仕舞い込む。

「うん、これでいいな。」

「喜んで貰えると良いのだが。」

「間違いないさっ。」

しんしん、と雪が降る。

静かな夜。

「明日は、一杯うまいもの作ろうなっ。」

「うむ。我が人生最高のクリスマスとなることは間違いない。」

「俺もだっ！」

微かに鈴の音が聞こえたのは、夢か、それとも。

目が覚めて、あたり一面雪が積もって。

枕元には、幸せを願った贈り物。

これからも、幸せであるように。

これからも、日々が温かく、幸せであるようにと願いを込めて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2297b/>

うりと夏休み～うり～

2010年10月14日00時39分発行